日本、五輪３大会連続「金・銀・銅」制覇

～ 従業員６人の会社で世界を制覇する（2）～

その後、スポーツ用品メーカーからの依頼を受けて、1964 年から陸上競技用具の分野に進出し、ハードルの製造に取り組み 95%のシェアを占めるまでになりました。しかし、依頼のあったスポーツメーカーが大手企業に買収されたため、自社製品として販売することになりました。

砲丸は 1968 年から製造を始めましたが、日本国内にも国際規格が採用されたため、当時 10 社あったメーカーが、国際基準の誤差 20 ミリ、表面全体の厚さで 100 分の１ミリにもならない基準に対して、「採算が合わない」と一斉に撤退してしまいました。辻谷社長は「人が出来ないと言うのなら、やってやろうじゃないか」と国際基準に挑み、ＮＣ旋盤を駆使して試作しましたが、当初は 100 個のうち 70 個が不良品というものでした。そこで、過去のオリンピックで使われた砲丸を世界中から取り寄せて割って調べたところ、砲丸に穴を開けて鉛を詰めて調整しているということがわかりました。このような外国製の中途半端な砲丸づくりは、「職人としての誇り」が許しませんでした。砲丸づくりは、それほど儲かる仕事でもなく、あきらめずにやり続けたのは「職人としての意地だけ」だったそうです。

鋳物（いもの）工場に修業に行き、材料の鋳鉄の特徴を理解して試作しましたが、最初の１個から 30 個目までは同じ重さでしたが、150 個を作り終えたときには、150 グラムも重い砲丸ができあがっていました。

試行錯誤を繰り返し、砲丸を作り始めたてから３年の歳月が過ぎたときに、あることに気づきました。砲丸で最も大切なものは、「重心」で「重心が１ミリずれると、飛距離が 1～2m違う」といわれるほどで、「納得のいく砲丸」とは、サイズと重さが正確なだけではなく、重心がぴったりと真ん中にある砲丸のことをいいます。

重心を真ん中に合わせるために 100 分の１ミリ以下の調整をする必要があります。これを、手のひらに伝わる感触と、音と光で違いを理解し、微妙な音の違いを 5 段階で聞き分けて「魔法の砲丸」を完成させました。

辻谷社長はロンドンオリンピック前に高齢を理由に引退しました。現在、３男が砲丸づくりを継いでいますが、満足のいくものが完成せず、「魔法の砲丸」の復活が待たれています。

資料番号：4-58-6	出所：坂本光司(2010)『ちっちゃいけど、世界一誇りにしたい会社』ダイヤモンド社